

接骨院に 心理学を入れてみた

〔5〕

寺田接骨院 寺田弘志

JR茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

体のどこかをいためた人たちが、ここを訪ねて来られます。

「どこが痛むんですか？」

「ひざが痛いんです」

「ひざの前ですか？ 後ろですか？ それとも内側ですか？ 外側ですか？」

「内側です」

「触ると痛いですか？」

「えっとー、あっ、そこ、そこ！ そこが痛いです」

「ひざをどこかにぶつけたとか、ねじったとかしたおぼえはありませんか？」

「そういう記憶はないんですけど……」

「そうですか。では、脚を閉じると痛いですか？ 開くと痛いですか？」

「あっ、開くと痛いです。閉じ



るほうが痛くないです」

「ひざを曲げると痛いですか？ 伸ばすといたいですか？」

「んー、あんまり曲げ伸ばしでは、痛みは変わりませんね」

「こういう場合、脚の外側の筋肉が縮みすぎていて、脚の内側の筋肉が伸びすぎていたんではないかとよくあります」

「へー、そうなんですか」

「脚の外側の筋肉を触ってみて痛いですか？」

「んー、痛いところはないです」

「脚の内側の筋肉にも、触って痛いところはないですか？」

「えー、はい、ありません」

「おやー、さっき言ったようなタイプのひざの痛みではないようですね」

「あら、そうなんですか」

「では、骨盤を上げて触ると痛いですか？」

「あっ、痛い、痛い」

「ごめんなさいね。じゃあ、骨盤を下げるかと？」

「あら、痛くない」

「となると、ひざの痛みの原因は、脚ではなくて、腰とか背中とか、上のほうにありそうですね」

「えー、腰とか背中とは、何ともないと思っていましたけど」

「腰とか、背中を触ってみて痛いですか？」

「んー、いいえ」

「じゃあ、肩はどうですか」

「痛い！ めっちゃ痛い！ 先生、ひざを触るより、肩を触ったほうが痛い」

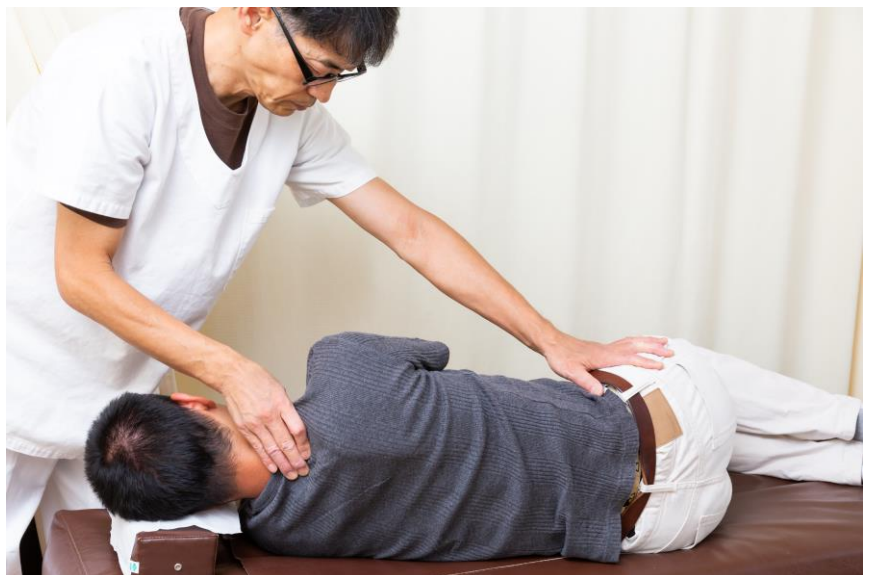
「そうですか。じゃあ、骨盤を下げて肩を触るとどうですか？」

「え、うそでしょ。ぜんぜん痛くない」

「では、しばらくこのまま肩をほぐさせてください」

「はい、ありがとうございます。あー、気持ちいいわー」

「これくらいほぐしてみて、骨盤を下げるのをやめて、肩の痛みはどうですか？」



「いや、もう、ちっとも痛くないわ。さっきと同じ力ですか？」

「はい、同じ力で触ってますよ」

「ゆるく触られてるみたい」

「ところで、ひざの痛みはいかがですか？ はじめはここが痛いとおっしゃってましたね」

「あれ、痛くない。なんでー？」

「ひざの痛みの原因は肩にあったようですね。腰か背中かと思いましたが、もっと上でした」

「肩からひざに来るんですか？」

「首から来る人もいますよ」

「ほんとですかー。びっくりだわ」

体のどこかが痛むとき、痛む箇所自体に原因がある場合と、違うところに原因がある場合があります。通常は、痛む箇所自体に原因がある場合が多いです。

ただ、当院に来られる患者さんについては、痛む箇所以外に原因がある場合も、かなりの割合であります。

どうしてそうなるかという、まず、痛む箇所は放っておくだけで治ることがあります。

そういう人は当院には来ません。

また、自分で、湿布を貼ったり、ストレッチをしたり、マッサージしたりして治す人がいます。

そういう人も当院には来ません。

ただ、そういう人が湿布をしたり、マッサージしたりするのは、たいてい痛む箇所自体なのです。

痛む箇所と違うところに原因がある場合、いくら痛む箇所に湿布を貼ったり、マッサージしたりしても治りません。

レントゲンやMRIをとっても、内視鏡で関節の中を見ても、原因は見つかりません。

「自分でいろいろやってみたけど、治りませんわ」

「病院で検査しても、異常ないって言われるんです」

とおっしゃるような方が当院に来られることになります。

ですから、自然と、痛みの原因が、痛む箇所と違うところにある方の割合が当院では高くなります。

もちろん、痛む箇所に原因がある方も来院されています。

そういう方には、痛む箇所に必要な施術をします。

痛みの原因が、痛む箇所以外にある方には、痛みの原因がある箇所に施術をします。

両方に原因があるという場合もあるのですが、そういう方には、両方に施術をします。

このような施術は、以前、心理療法に従事していたときに用いていたシステムズ・アプローチに影響を受けています。

細胞、組織、器官、人体、家族、集団、社会、国など、レベルはさまざまですが、いろんな要素が集まって仕組みとして機能しているのがシステムです。

問題の出ている箇所ばかりでなく、その箇所をふくめたシステム全体から解決を図っていくのが、システムズ・アプローチです。

たとえば、何かの機械で、同じ部品がよく故障するとします。

この場合の対応は、いくつか考えられます。

- 1 いつ故障してもいいように、交換用の部品を常備しておき、壊れたら交換する。
- 2 故障する期間を計測して、使用期間を決めて、故障する前に定期的に部品を交換する。
- 3 部品を改良して、故障しないようにする。
- 4 機械の構造を見直して改造し、部品が壊れないようにする。

これらの中でシステムズ・アプローチと言えるのが4になります。

これが人の話になると、部品のように交換するわけにはいかないもので、そういう選択肢はなくなります。

つまり、人を変えるか、人をとりまく家族・集団・社会などのシステムを変えるかになります。

しかし、問題を抱えている人は、変わりにくいこともあります。

一方、社会とか国は大きすぎて、変えにくいこともあります。

家族なら、協力も得られやすく、変化を起こしやすいので、家族へのはたらきかけは、しばしば有力な選択肢となります。

不思議なことですが、家族が変化すると、問題を抱えている人にも変化がよく起きます。

これが関節の話になると、人の話よりはシンプルです。

時には、家族に協力をお願いしたり、学校や職場に意見書を提出したりすることもあります。

こういうのもシステムズ・アプローチになります。

ただ、それほど頻度は高くありません。

関節なら、人の体というシステムの中で変化を起こせば事足りることがほとんどです。

ある関節だけ治療しても良くならなければ、その関節を動かす筋肉を調整します。

それでもだめなら、体の中心側の関節や末梢側の関節を調整します。

それでもだめなら、もっと離れたところに原因がないか探します。

ウソのような話ですが、右ひざの痛みが、たまに左脚を調整すると消えるといったケースもあります。どうしてそんなことが起きるのだろうと不思議に感じますが、体をシステムとして考えると理解しやすくなります。

たとえば、右ひざをいためると右脚に緊張して縮んでくる筋肉が生じます。その筋肉の緊張で骨盤がゆがみます。左右対称に(前後に)骨盤がゆがんだ場合は右と同じような筋肉が左脚も縮みます。左右非対称に(右が上がって左が下がるとか、右が前で左が後ろとかに)骨盤がゆがんだ場合は、右とは違う筋肉が左脚も縮みます。

いくら右脚の縮んだ筋肉を伸ばしても、左脚の縮んだ筋肉を放置しておく、骨盤のゆがみが残っていて、また右脚の筋肉が縮んでしまうことになります。

こんなときに左脚の縮んだ筋肉も伸ばすと、骨盤のゆがみがとれ、右脚の伸ばした筋肉が縮みにくくなり、右ひざの痛みが消えるといったことが起きるのです。

東洋医学(鍼灸など)では、遠隔治療といって、わざと患部と離れたところに治療することがあります。

患部を治すために、患部と離れた箇所施術するという接骨院はまだ少ないように思います。

もし、原因不明の痛みがあれば、当院を訪ねてみてください。

当院では、患部への施術だけでなく、体をひとつのシステムと考え、患部と離れた箇所からシステムに変化を起こすことで患部の痛みを改善させる施術をおこなっています。

意外なところに痛みの原因が見つかるかもしれませんよ。